

## 善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐる

## 第12回

## 女を嫌うための作法（下）

阿部公彦

Abe Masahiko

女嫌いのありありと見えるチェスタフィールド卿の手紙は、猜疑心や計算高さが目立っているが、その鍵となった概念がある。「注意」(attention)である。

人間をちゃんと理解するには本を読むのと同じくらいの注意と熱心さが必要である。また賢さの見極めとなると、ひょっとすると、本を読むとき以上のものが必要となるかもしれない。私には今、多くの年配の人の知り合いがいる。彼らは一生を上流社会ですごしてきても、たいへん軽率で不注意だったおかげで、15歳のときと比べて何も学んでいない。だから、だらだらとくだらないおしゃべりにふけるだけで人間を理解できるなどとは、ゆめゆめ考えてはいけない。単に人を見るだけではなく、見抜かなければならないのだ。(43-44)

人間の振る舞いを指南する礼節書や作法書に通底するのは、人間の細かな振る舞いに注意深くなるよう促す、観察者の精神

である。<sup>1</sup> チェスタフィールド卿もまた、この点をしきりに強調するが、息子に向けた彼の指導は徹底的に冷徹なものだった。とりわけ、人間の「情」に対するチェスタフィールド卿の目は、過酷なほどドライである。

程度の差こそあれ、どんな人も生まれつきさまざまな感情を備えている。ただ、どの人もあるひとつの中心的な感情というものを持っていて、ほかの感情がその感情に呑まれることになる。大事なのは、まずその人の中でどの感情が支配的か見極めることだ。心の襞にわけいって、同じ感情でも人によってその働きがぜんぜん違うことを確かめるのだ。そして、もしある人にとって支配的な感情を見つけ出したなら、その感情が働いているときは決してその人を信用しないように気をつけるのだ。必要なら、その感情を助けにその人を説得するのもいいだろうが、彼が何か誓いを立てたととしてもくれぐれも用心するのだ。(44)

チェスタフィールド卿は人間のとりわけ感情的な部分をひどく警戒している。彼のミソジニーの根源にも、女性が見せる感情性への嫌悪がある。しかし、その一方で、人間が感情から自由ではないことも彼は知っている。だから、利用せよ、というのである。

<sup>1</sup> 内容のせいもあって、現在に至るまで『チェスタフィールド卿の手紙』を肯定的に論ずる研究者は少ないが、数少ない擁護者のひとりのプーレンは、チェスタフィールド卿がロック以来の「外観」と「現実」の相克の問題に関心を持ち続けていたのだと指摘している。卿は「外観」が多くを決めてしまう社会のあり方に問題意識を持ちつつも、その中で生きていくために、仕方なく自分なりの処世術を磨き上げていったとの見方である。

相手には自分の視線を気取られてはいけないというのはチェスタフィールド卿の重要な教えである。相手に警戒させてしまったら、こちらが相手のことを観察できなくなってしまうからである。

腹黒くて何を考えているかわからない人物と見られないよう気をつけなければならない。そんなふうに見られたら、好ましくない人物と思われるだけでなく、何か悪いことを企んでいるととられるだろう。こちらが相手に何を考えているかわからない人物と見られたら、相手もこちらに対して実際何を考えているかわからないような振る舞いにでるだろう。そうしたら、何も見抜けなくなる。(105)

このようにチェスタフィールド卿の視点からすると、あらゆる社交活動は、一時も心を休めることのできない、読むか読まれるかの緊張感に富んだ戦場のようなものということになる。好意的に見ればいかにも外交官らしい考え方も言えるが、こうした生き方を息子に教え諭すというあたりに、あまりに露骨な計算高さや偽善的でモラルの欠如した人生観を見て辟易する人も多かった。つまり、チェスタフィールド卿の人生訓は、一方で息子に対する愛情を感じさせはしても、他者に対する悪意と警戒心に満ちており、いわゆる美德とは縁のない、たいへん利己的な指南書として読める部分が多かったわけである。多くの文人とも交わりを持ち、政界の有力者として華やかな舞台にいた人物のこうした生々しい自説開陳は、読者にセレブの暗部を垣間見させるような気分を引き起こした。

ただ、チェスタフィールド卿にまったく「徳」の観念がなかったかというところでもない。むしろ逆に、『チェスタフィー

ルド卿の手紙』を貫いてあるのは、「上品さ」(decency)とか「適切さ」(propriety)といった徳の意識だった。16世紀以来、徐々に英国に浸透し、17世紀から18世紀にかけては一気に通俗化しつつあったマナーに対するこだわりが、politenessとか、to give pleasureといった言い回しを通して『チェスタフィールド卿の手紙』の中でも繰り返し説かれているのである。まだ幼少期にあったフィリップに対する手紙には次のような一節がある。

人生のもっとも重要な要素のひとつは品だ。それは場をわきまえた適切な振る舞いをするということだ。あるときある場所でふさわしいことが、別の状況ではまったく許されないということがよくある。たとえば遊んでもいい時間というものがある。一日のうちにはあるけれど、メテールさんが来てくださっているときに、たこ揚げをしたり、9ピンゲームをしたりするのは、たいへん行儀が悪いことだと考えなければいけない。大いに踊るのも結構。だけど、踊ってもいいのは舞踏会や遊びのときだ。教会に行ったときやお葬式の最中に踊ったりしたら、バカだと思われる。(12-13)

品とわきまえこそが人生の一大事だという。そこにあるのは、ふさわしいときにふさわしい行動をとるべきである、という、それ自体とりたてて異常とはいえない教えだった。しかし、それが極端な実例や細心の注意にからめて説かれると、過剰で上辺だけの繕いに見えてくる。たとえば「笑うことにはとりわけ注意しなさい。いつもにこにこしているのはとてもいいことだが、声をあげて笑っているのを聞かれたりしたらぜったいだめだ」(72)などという助言には驚く。『チェスタフィー

『ド卿の手紙』の中でもあまりに胡散臭い部分としてしばしばあげつらわれたのは、肉の切り方 (carving) についての次のような一節だった。

細かいことと言えば、他にも言うておくべきことがある。たいへん些細なことだけど、少なくとも一日一回はあることだから、注意が必要だ。それは肉の切り方のことだ。君は上手にそうっとやっているか？ いつまでも骨と格闘してはいないか？ 周りの人にソースをはね飛ばしていないか？ グラスをひっくりかえして隣の人のポケットをびしょ濡れにしたりしてないか？ こういうことで不作法なのはたいへんみっともない。あまりしょっちゅう起きると、みんなの笑いものになる。ちょっと注意すれば避けられることなのだ。(68)<sup>2</sup>

たかがナイフとフォークの使い方についてこれだけもったいぶって語ったために、この一節自体が大いに諷刺の対象となったようだが、**politeness** という美德をつねに頭に置きつつ、細かい作法に目配りするのが人間にとって大事なことなのだという姿勢は、17世紀から18世紀にかけて英国を覆っていった規範への信奉と少なからず軸を一にするものである。

ある意味では1774年に出版された『チェスタフィールド卿の手紙』は、16世紀以来の礼節書、作法書の普及がたどり着いたひとつの極点だったとも言えるだろう。会話術にしても、食卓でのマナーにしても、すでに詳しく見た『ガラテオ』や『礼節の決まり』以来、大陸から輸入されつづけてきた宮廷文化の伝統を汲んだものには違いないが、『チェスタフィールド

<sup>2</sup> この一節はオックスフォード版未収録のため、1774年版(第2巻)に基づき、その頁数を記した。

卿の手紙』にはっきり表れているのは、そうしたものを技術として、上辺の見せかけとして身につけることができるのだ、そして非嫡子というハンデを背負った人間は、出世するためにまさにそうしなければならないのだ、という考えでもあった。<sup>3</sup>

だから、会話におけるマナーを説くときにも、チェスタフィールド卿のアドバイスは、その出だしにおいては「いかに相手を心地良くさせるか」という徳から出発しつつ、最終的にはたいへん技術的になる。

相手を心地良くさせる技を身につけるのは大事なことだが、そう簡単に習得できるものではない。こうすればいいという規則があるわけではないのだ。私が教えることよりも、君自身の直観や観察が助けになる。自分がしてほしいと思うことをする、というのが相手を心地良くさせるためのもっとも確実な方法だ。相手がどんなことをしてくれたときに気持ちがいいかを注意深く観察するのだ。おそらく相手だって同じで、君がそうしたことをしたときに気持ち良くなるはずだ。もし相手が君の気持ちや好みや趣味に好意を示してくれたり、尊重してくれたりしたときに君が良い気分がするなら、君が相手にそのようにしてあげたとき、相手も良い気分になるはずなのだ。その場の雰囲気に合わせてやるのだ。自分が雰囲気をつくらうとしてはいけない。とにかくその場の空気を読んで、ときにはまじめに、ときには陽気に、ときにははしゃいで見せる。こうやって全体に奉仕するのが、グループでいるときの個人の務めというものだ。(57)

<sup>3</sup> プーレンは、そうした風潮をチェスタフィールド卿が蔓延させたわけでは決してなく、時代が彼にそうさせた、18世紀とはそういう時代だったのだと主張している(515)。

会話をするときにも、いつも周囲の空気を読まなければならないという。こうして神経質なほどに「心地良くさせる」(to please) というジェスチャーにこだわるチェスタフィールド卿だが、その真意がいったいどこにあるのか、よく考えてみるとわからないところもある。彼は女性に対し露骨な蔑視を見せるが、実際には、心地良さの追求という点においては彼自身が女性の体現する価値に積極的に身を投じているとも見えるのである。彼は偽善的で「見かけ」にこだわる女性のイメージをつくりあげたうえで、それをあざ笑うが、実際には彼自身ももっともその女性のイメージと重なるような振る舞いを推奨しているということである。そこに透けて見えるのは、適切な振る舞いを出世のための重要な手段として息子に伝授しようとしつつも、そのような自分の方針にひそむ灰汁のようなものに鈍感ではいられない彼の独特な居心地の悪さのようなものかもしれない。

『チェスタフィールド卿の手紙』が示すのは、「心地良くさせる」ための礼節という社会的な装置が、単純な心地良さとはほど遠い深謀遠慮や警戒によってこそ保てるものだという考え方である。そういうことを人が意識するようになったのが18世紀という時代だった。心地良さは心地良さによって生み出されるわけではない。むしろ逆かもしれないのである。心地良さは正反対の、神経質で非寛容な猜疑心のようなものこそが、心地良さを生む。そうだとしたら、突き詰めて言うと、善意の表出は悪意によってこそ完成するという話にもなってくる。実際、そのせいもあって18世紀には、「丁寧」の影に禍々しいものが隠れているという見方が頻繁にされるようになった。「丁寧」と「偽善」との境目に人々が敏感になってきたわけで

ある。臨機応変な言葉の使い方は「丁寧さ」にはつきものだが、それはひいては虚言に通ずるのではないか？ とか、女性に対する親切さも最終的には情事に向けた下心と無縁ではないのではないか、といった不信感が生まれてきたのである。<sup>4</sup>

あるいは『チェスタフィールド卿の手紙』に充満する居心地の悪さは、そのあたりの問題とも関係するのかもしれない。一見礼節と対極に位置するかと見える機嫌の悪さや攻撃性が、広い意味での礼節という装置の中ではきわめて重要な意味を持ってくる、つまり、むしろ不機嫌を通して礼節を表現するといった考え方の萌芽もすでにこの頃から見られたのかもしれない。

いずれにしてもデイヴィッドソンも指摘するように(65)、『チェスタフィールド卿の手紙』の刊行とそれに続く騒動は、「丁寧」をめぐる大きな潮目の変化を示す出来事となった。本そのものは出版後たちまちベストセラーとなり、20を越える版に加えてさまざまなアダプテーションや抜き書きの類も出回ったが、刊行時にはそれほど大きな問題を引き起こすとは思われなかった著者の人生態度が、1780年代から1790年代にかけて英国で進んだ保守化の中で大いに問題視されるようになり、仏革命に伴う政治的な保守主義の台頭とも相まって、悪評はすっかり定着することとなる。英国は18世紀末から19世紀初頭にかけて政治的にも激動の時代を迎えるわけだが、そうした中で「偽善」が問題視されるようになった背景には、「丁寧」を身にまとうことで成り上がろうとした新興中産階級と、旧来の秩序に拠ろうとした守旧派との対立という構図も見て取ることができる。と同時に、女性嫌悪という意味では共通点も見られ

<sup>4</sup> このあたりの事情についてはデイヴィッドソン(2章)参照。

なくない 19 世紀初頭のダンディズムや、逆に明確なコントラストをなすロマン主義精神など、『チェスタフィールド卿の手紙』に体现された「丁寧の文化」の歴史的な文脈については、まだまだ考察の余地がありそうだ。<sup>5</sup>

### 〈文 献〉

\*『チェスタフィールド卿の手紙』からの引用は、比較的入手しやすい Oxford Classics 版 (Lord Chesterfield. *Letters*. Ed. by David Roberts [London: Oxford U.P., 1992]) を元にして拙訳し頁を記したが、この版に未収録の「肉切りエピソード」については以下の版から採った。

Stanhope, Philip Dormer. *Letters Written by the Late Right Honourable Philip Dormer Stanhope, Earl of Chesterfield, to His Son*. Ed. by Eugenia Stanhope. 2nd edn. 4 vols. (London: J. Dodsley, 1775/1774)

その他の文献は以下のとおり。

Boswell, James. *Life of Johnson*. Ed. by R.W. Chapman (Oxford: Oxford U.P., 1998/1980)

Davidson, Jenny. *Hypocrisy and the Politics of Politeness*:

*Manners and Morals from Locke to Austen* (Cambridge: Cambridge U.P., 2004)

Mayo, Christopher. “Manners and Manuscripts: The Editorial Manufacture of Lord Chesterfield in *Letters to His Son*,” in *The Papers of the Bibliographical Society of America*, 99.1 (2005), 37–69.

Pullen, Charles. “Lord Chesterfield and Eighteenth-Century Appearance and Reality,” in *Studies in English Literature, 1500–1900*, 8.3 (1968 Summer), 501–15.

Roberts, David. ‘Introduction’ in Lord Chesterfield. *Letters*, ix–xxiii.

山田勝『ダンディズム——貴族趣味と近代文明批判』（日本放送出版協会 1989）

——『ブランメル閣下の華麗なダンディ術——英國流ダンディズムの美学』（展望社 2001）

（東京大学准教授）

<sup>5</sup> 19 世紀初頭のジョージ・ブランメルにしても、19 世紀末のオスカー・ワイルドにしても、「ダンディズム」のことさらな標榜は、しばしば取り澄ました「偽善性」に対する反発に根ざしており、そのせいもあって、神経を逆なでするような派手な露悪性を伴うことが多かった。これが『チェスタフィールド卿の手紙』の中にしばしば見られる「目立つな」との指南と好対照を成しているのは興味深いだろう。ダンディズムについては山田勝の一連の著作が参考になる。